

フィジカルを鍛える

今秋のラグビーのワールドカップは大盛況で幕を閉じました。「^{にわ}俄かラグビーファン」が大勢生まれ、大会が終わると「ラグビーロス」、即ち試合がないことに喪失感^{そうしつかん}を覚える人々も話題になりました。ゆえに連日、代表選手はテレビ番組に引っ張りだこで、視聴者側の豆知識も増えていきます。その中で、世界のトップチームに挑むために厳しい練習に耐え、「フィジカルは負けない自信があった」と語る選手が多いのは印象的でした。フィジカルは個々の身体^{からだ}のことです。これをライバルたちより鍛え上げた^{きた}事実は、優れた技術や戦術、精神力の土台となるものだけに、絶対の自信に繋がったと言うのです。

これは多くの分野に共通します。ノーベル賞を受賞した科学者の会見にも、「日本の強さは基礎研究の強さ。そこに人材が育つよう、環境を整えるべき」等と基礎の大事がよく出ます。画期的な発見は、ひらめきや柔軟な思考が大切ですが、それも基礎があればこそです。ところが今の日本は、基礎研究にも「それが資金繰りに役立つか」との視点が求められ、憂^{うれ}うべき状況と警鐘^{けいしやう}を鳴らす声も聞こえます。土台作りは地味で根気が要りますが、疎かにしては花が咲きません。

ご弘通が低迷すると、悪い状況の原因を他に求め、新たな打開策が提案されます。これは当然、大事なことですが、「いろいろやっても好転しない」「事態を変える妙策がない」のであれば、土台となる地力、即ち自身の低下したご信心のフィジカルの見直しが有効です。たとえば朝参詣。これは御利益をいただく基本です。「朝参詣してお教化を授かろう」「朝参詣して元気になっていただくんだ」「受験に合格しよう」「恋を成就しよう」等々の思いが起きない信者では、肝心のご信心が緩み切っていますから、ご弘通どころではありません。必死で御法にお縋りすれば、そこに御利益は顕れます。そんな「信じて縋る思いの強さ」がお寺参詣という行動となり、朝参詣の実践になります。言い訳を挑戦に切り替えると地力は鍛えられるのです。

たとえば口唱。普段のお看経が出来ていない人は声の出かたが違うので、一緒に唱える^{かんきん}とすぐ分かります。それは年齢相応の声量とは別の「口唱に馴れない音」で、空気感も違^{おおむ}います。後ろ姿を見る機会は少ないですが、ちゃんとお看経する訓練がないと、概ね姿勢も崩れています。時間通りに口を動かせば良いではありません。御法さまへの思いを包み、一生懸命に唱え重ねる鍛錬^{たんれん}が、ご信心のフィジカルを格段に上げるのです。最近、お道具係が扱う長いお線香の売り上げが落ちているとか。口唱の改良は急務かも知れません。

ほかにもお給仕や御法門聴聞、お教化やお助行等、基本的な日常信行は大切で、これらが正しく行われ、ご信心を鍛えていなければ、新たな試みも目先を変えただけの小手先の改革となって、効果は出ません。そもそもお看経も参詣も教わらない人は、信行相続ができない道理と同様、ご信心のフィジカルがゼロではご利益を顕す信者となるのも困難です。

弘通年度が改まる節目、良い一年のご奉公に臨むために基本を見直して、組内のご信者と共に土台を鍛えましょう。

(松風寺月報 令和1年12月号)